

巻頭言

エア・アンド・スペース・パワー研究をお手に取って頂き、誠に有難うございます。

“Ihr seid alle Idioten zu glauben, aus Eurer Erfahrung etwas Irnen zu können, ich ziehe es vor, aus den Fehlern anderer zu lernen, um eigene Fehler zu vermeiden”

Otto von Bismarck

「自身の失敗から学ぶなどと考えるのは愚かなこと。私は失敗を避けるため、他者の失敗から学ぶことにしている。」—鉄血宰相ビスマルクのこの言葉は、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というフレーズで我が国では広く知られます。しかし実のところ彼は「賢者」という言葉は使わず、「失敗を避ける」ことを述べておりました。

「鉄と血 (*Eisen und Blut*)」の必然を述べた「鉄血演説」に、固い決意と同時に深遠な優しさを感じるのは私だけでしょうか。兵士にも家族もいれば恋人もいる。その点では敵もまた同じです。避けなければならない「失敗」とは、つまり戦争です。勝てばいいということではないのです。

しかし現実には甘くない。プロイセンの首相兼外相であった当時、彼はドイツの統一は議会における話し合いでは達成できないことを覚悟していました。文字通り兵士の「血」と、弾丸を意味する「鉄」以外に、ドイツ統一を実現する手段はなかったのです。そして統一なくして強大なフランスを前に独立は維持できませんでした。

今号の特集は「戦略研究から見たウクライナ戦争」になります。遡れば2021年の末頃、ロシアからの圧力は臨界点近くまで達し、ウクライナはそんなロシアを抑止できませんでした。さらに開戦から1年を過ぎても戦争は終息の兆しを見せません。対岸の火事ではなく他山の石とできるかが問われています。

特集の先陣を切るのは「戦略研究とは何か」(水岩)です。不確実性を「闇」と捉え、そこに備える手がかりをもたらず「光」の役割を戦略に求めます。本特

エア・アンド・スペース・パワー研究（第11号）

集のみならず戦略研究を貫く議論の土俵の設定を試みています。

続く「*“Thinking” the Caroline and Outer Space* —自衛権行使要件に潜在する戦争被害の抑制効果—」（三浦）は、「カロライン号事件」という国際法学の古典的事例を手掛かりに、ウクライナ侵攻に際してロシアが主張した自衛権の立論に潜む問題を鋭く指摘しています。この議論は宇宙での武力行使に関わる射程を備えていることが示されます。

次いで、「対立から協調への転換 —ゲーム理論的観点からの模索—」（青柳）は、ウクライナ戦争の構造に着目し、協調を模索する交渉のプロセスとして戦争を捉える見方を展開しています。数理モデルの先行研究をウクライナ戦争に適用して考察します。

更に「危機における『柔軟に選択される抑止措置』（FDO）のゲーム理論分析—メカニズム、効果、限界—」（片山）は、危機の状況における暗黙の危機交渉の手法としてMFDOを位置づけ、豊富な先行研究に照らしその機能とメカニズムを明確化しています。

特集の最後を飾る「ウクライナ戦争と台湾 —世論調査結果に見る台湾社会の「非対称的」対中認識—」（大磯）は、ウクライナ戦争から視線を転じ、台湾が中国に対する認識をどう変化させたのか、その影響を見る視座を提供します。

さらに今号には特別寄稿として「紛争研究における複雑系思考の適用可能性—紛争連鎖モデルを軸として—」（光辻）を掲載しています。本誌の目指す自由闊達な議論に呼応する、多角的かつ新規性あふれる進取の議論にご注目ください。

今号にご玉稿をお寄せくださった執筆者をはじめ、様々にご協力頂いた方々に心より感謝します。今後とも航空研究センターの諸活動にご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

『エア・アンド・スペース・パワー研究』編集委員長
航空自衛隊幹部学校 副校長
空将補 秋山 圭太郎

（役職及び階級は令和5年5月巻頭言執筆当時のもの）